

# ともしび

2012



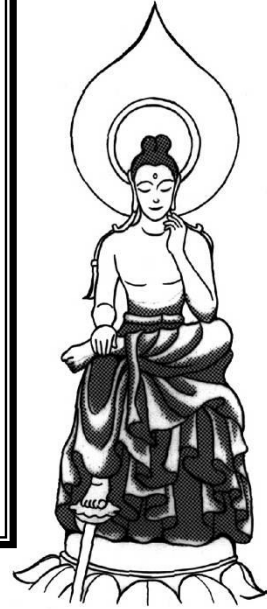
夏の節句七夕を迎え、いよいよ夏本番となってきました。この季節、楽しみといえば夏祭り。花火、パレード、盆踊りなど日本全国津々浦々で様ざまなお祭りが催されます。

「夏祭り」と聞くと、私は縁日の屋台を思い浮かべます。子供の頃、祭ばやしが聞こえてきたり、屋台から香ばしい匂いがただよってくると、お祭りの様子が目に浮かび、居ても立ってもいられませんでした。わたあめ、射的に金魚すくい……。何もかもが楽しい、夢のような時間でした。持ち帰った金魚を大切に世話して、何年も育てられたのはとても良い思い出です。

大人も子供も大勢の人が集まり、ワイワイがやがや、賑やかな様子が、私の心を躍らせるお祭りの醍醐味なのです。

〈日比博英〉  
ひび たくえい

# 「ブツダと私」



犀の角のように  
ただ独り歩め



「犀<sup>さい</sup>の角」とは、お釈迦様がお生まれになられたインド北部やネパール周辺に生息しているインドサイの角を表しています。その堂々と生えた一本の大きな角のように、何事にも惑わされず、一人黙々と修行を行なうべきだと、悟りを求める修行僧のあり方を表したお釈迦様の教えなのです。この言葉が示すとおり、修行するためには親しい友人や愛すべき家族と別れなければなりません。お釈迦様もまた、愛する家族を残し、出家したのです。

元々王族だったお釈迦様は、この世の苦しみから逃れるために、自分の持っている富、名誉、地位、ありとあらゆるものを捨て、出家しようと考えていました。その決意が固まろうとした時、お釈迦様に一人の息子が生まれたのです。その知らせを聞いたお釈迦様は思わず、「出家をするためのさまたげが生まれ」と呟いたそうです。何故そのようなに呟いたのか。それは、家族との繋がりもまた多くの苦しみを生み出す一つの要因だからです。出家への思いか、家族への

愛情か。激しい葛藤の末、お釈迦様は出家する道を選びました。それはとても辛く、悲しい決断だったと思います。

私自身、大学を卒業した後、お坊さんの勉強をするために福井県の永平寺で修行をしました。当然そこには今まで当たり前のようにそばにいた仲のいい友人も、自分を支えてくれた家族もいません。今まではまったく違う世界での厳しい修行生活。辛い時もありました。苦しい時もありました。実際に泣いたこともあります。たった一ヶ月ほどの間に、自分がどれだけちっぽけな存在で、彼らに依存してきたのかと痛感しました。しかし、どんなに辛くても自分の意志でここに来たからには、そこで修行を止めて帰る訳にもいきません。最初の頃はただただ必死に忙しい日々を送るしかありませんでした。

そんな時に私を支えてくれたのが、他でもない共に修行する仲間達の存在でした。最初の頃はお互い緊張の中で生活し、自分のことで精一杯だったので

すが、次第に割り当てられた仕事の中でわからないことがあつたらお互いに確認しあつたり、毎日読むお経を覚えるために夜遅くまで一緒に練習したりと、時に励まし、助け合いながら日々の修行を送るようになってのです。永平寺での修行を終え、改めて今までの修行生活を振り返ってみると、本当に沢山の方々に支えられていたのだなと改めて実感します。

確かに、修行をする上で独りになることは重要なことなのかもしれません。しかし、私達は知らず知らずのうちに多くの人達に支えられ、共に助け合いながら生きていくのです。大切なのは全てを完全に切り離すことではなく、また彼らに頼り切ることもありません。そのことを十分に理解し、良い関係を保ち続けるということなのです。独りのようで独りでない。その姿はまるで、強く立派な角を持つサイが、時には大きな群をなし、お互い助け合いながら厳しい自然の中で生きていく姿に似ているように感じます。

## 私の

## ふるさと



第三回 静岡県 黒船祭



市街を行進するアメリカ海兵隊

今月は静岡県下田市で毎年五月に行われる「黒船祭」をご紹介します。下田は幕末に開国の舞台になり、市内の各所に史跡があつて、歴史ロマンを感じるこ  
とができる街です。「黒船」は、開国を迫って日本へ押し寄せたアメリカ海軍の艦隊のことを指しています。

「黒船祭」は、国際開港八〇年を記念して開催されたのが始まりで、当時のアメリカ人船員の供養や、国際親善を目的としたイベントなどが行われます。祭り当日は、アメリカ海兵隊のパレードや、当時の仮装をして日米和親条約の再現をする劇など、市内は一気に国際色豊かになります。

子どもの頃、特に楽しみだったのが、アメリカの人との交流です。百円玉を握りしめて、「チェンジコイン！」と海兵隊の人に話しかけると、日本とアメリカのお金を交換してもらえたのです。青い目をした外国人と言葉を交わし、外国のお金を手にする。「黒船祭」は私にとって初めての国際交流だったのです。(澤城 邦生)

〒105-8544 東京都 港区 芝 2-5-2 曹洞宗宗務庁内  
曹洞宗総合研究センター 教化研修部門 一般教化課程  
ともしび法話会

TEL 03-3454-6844 FAX 03-3454-7180

2012(平成24)年 7月1日発行 第366号